

クジャクチョウとの初めての出会いは中学1年のときの理科室だ。チョウの世界の楽しさを知って、年に数回はみんなで昆虫採集に出かけるという科学班というクラブに入部し、上級生から「先生秘蔵のチョウ標本があるぞ」と見せてもらったのが、黒一色の裏面だけがみえる初めて目にするチョウが納まった三角紙。先輩はコヒオドシだという。横山光夫著の日本原色蝶類図鑑を眺め回していたはずなのにチョウの裏面までは記憶になく、早く翅表をみてみたい。先生に展翅OKとの了承を得て、胸を高鳴らせながら標本を傷つけないようそっとピンセットで覗いたそのチョウがクジャクチョウだと分かったときの感動は今でもありありとよみがえる。

初めて生きたクジャクチョウを見ることができたのは、1962年、下諏訪の蝶友津田進さんに招待していただき、高知県外への初の一人旅をしたときだ。霧が峰七島八島湿原の周回道路に案内してもらった際に、路面のあちこちに夢中で吸水する黒いチョウがいて、その翅先端の特徴からクジャクチョウだとわかり、他のチョウを驚かして逃がさないように手前の1頭から順番に静かにネットに収め、多くを生かしたまま三角紙に包み込む。高知に持ち帰り、家族に生きた美しい姿を見せてやろうという意識が働いていたからだ。



Aug.14,1968 美ヶ原山本小屋 クジャクチョウ

次いで1968年、妻と計画した信州旅行中、美ヶ原山本小屋周辺の花畑に集う多数のクジャクチョウを堪能し、やはりクジャクチョウは花を訪れる姿が一番似合うことを実感。当時はチョウを撮影する技量もなく、ましてやビデオカメラも普及していないので採集標本だけが思い出の記録となっている。

1976年の初めての北海道家族旅行時、阿寒湖湖畔にあった前田邸庭園でおびたしい数のコヒオドシに混じって飛び遊ぶクジャクチョウを楽しめたが、1999年、23年ぶりに訪れた阿寒湖湖畔の環境は様変わり。前田邸は自治体に移管されて往時のタンポポが咲く庭園は深い森に変身して、チョウが乱舞していたあの夢のような光景をみることはもう二度とできない。

クジャクチョウが乱れ飛ぶ状況を家族4人で楽しめたのが1984年信州蓼科高原の麦草峠だ。ちょうど第二化の発生ピークに出会えたようで麦草峠周辺の自動車道路沿いに咲くヒヨドリバナやフジバカマの花という花すべてにクジャクチョウやシータテハが吸蜜している状況で、カメラ撮影とようやく個人でもカラー撮影を楽しめるようになったビデオ記録も残せたが、その後の技術の進歩はすさまじく、現在のフルハイビジョン映像に慣れるとその画質差は歴然で、すべてを撮りなおしたい心境となっている。



Aug.30,1984 長野麦草峠
leg.Yoshiko Shimazaki

その後、2004年8月の開田高原で久しぶりに美しくクジャクチョウ



Aug.28,2005 御岳山

を目にでき、翌2005年8月には御岳山でようやく納得のゆく構図の写真撮影記録。2008年には32年ぶりの入笠山でフルハイビジョン映像撮影の機会を得たが、足場の悪いところで満足のゆく記録ではなく次のチャンスをねらっている。クジャクチョウはいつまでも飽きの



Aug.19,2008 長野入笠山

こない大好きなチョウで、このチョウとの出会いを求めて何度でも信州へと足が向う。

Sep. 5, 2012 信州 9月

9月2日は1984-5年にクジャクチョウやC・タテハの群れ飛ぶ光景に出会えた麦草峠へと走るも、気温が低く天候も曇りでチョウには出会えず、そのまま八千穂高原自然園までいってみる。この自然園ではマルバダケブキを訪れたクジャクチョウの報告があり、受付の男性に確認すると、確かに発生はしているがこの天候だと今日は見られないだろうと。麦草峠周辺でここ数年クジャクチョウをみないが、と話すと鹿が花を食ってしまうせいでチョウの数も激減しているとのこと。蓼科方面へともどろろと進む路傍に黄色い花が一団となって咲くコーナーが目に入り、自然園でみられるのであれば同標高(約1600m)のここらでも期待できるはず、と立



ち寄ってみる。進入禁止の林道入口部分で、崖沿いにオオハンゴンソウが群生している。天候がやや回復傾向で期待できるぞ、と黄色い花群をチェックすると、いる。クジャクチョウがいるのだ。ピカピカの新鮮個体が複数個体みられ、急ぎカメラを準備して撮影を楽しむ。

July 11, 2017 : 愛山溪へ

宿泊先のP-Dash Gardenから出発の準備で車に荷物を積み始めたタイミングで、早起きのクジャクチョウがヒラリと庭先に咲くブタナの花に飛来する。ビデオ撮影の絶好チャンスだと急ぎカメラをとりだし、好ましい撮影アングルを得るべく驚かさないように近づいていく。いくらかスナップ撮影ができたところで気が変わったのかクジャクチョウはアザミのある自動車道路傍へと転飛してみえなくなる。



かつてオオイチモンジをみた二股の右奥ダムまで行こうとしたが途中が工事中で進めず、その往復途上に1999年の訪問時に路面で吸水していたコヒオドシやミヤマカラスアゲハなどのチョウの姿が全く見られないという寂しい状況。やむなく一気に高度を下げてブタナが一面に咲く広場へと戻り、黄色い花に群がるウラギンヒョウモンを「青少年のための科学の祭典」用に妻と二人でネットインして過ごす。裏面の模様や鱗粉の濃淡など、かなりの個体差がみられるが、いちいち確認することはしない。稀にクジャクチョウとコヒオドシもブタナでの吸蜜目的で飛来するが、コヒオドシはカメラでの接近に敏感でとうとうこの日は撮影記録がとれず。



林道入口の手前 100m ほどの路傍右に「全面通行禁止」という大きな看板があつて度肝を抜かれる。でこぼこの穴だらけの未舗装道路を進むと、いきなり大きな重機が動く護岸工事が進行中の現場となり、部分的に鉄板が敷かれた道をゆっくりと進入していつてみる。工事関係の男性が当方の車に気づいているのは確かだが車での進入を静止するそぶりはなく、100m ほどの工事現場を通り抜けると通いなれた林道が奥へと続いている。木陰となった部分が格好の湿地帯となつていて複数頭のキバネセセリがあちこちで吸水している。さらに湿り気のある部分がないかと走ると、1km も進まないところで倒れこんだ大きな柳の樹が道をふさいで完全に通行不可。この状況を目にして初めて全面通行禁止とした理由に納得。道をふさいだ小山部分にある獣道様の小径ルートを徒歩でたどつてみて見えた林道は、道幅の 4/5 程度が完璧に破壊されて大きくくぼんでいるという実態に驚くばかり。すさまじい土石流によるものだろう。大きな石がごろごろとむき出しとなつて荒れた部分を慎重に踏みながら奥へといつてみると、100m も進まないところで長さ 10m 以上はあるくぼんだ部分が大きな水たまりとなつていてもはや徒歩でも先へと入り込めない。川べりのブッシュをかきわけて進めば、再び荒れた林道を奥へと行けそうだが、ヒグマの出没などこれ以上の単独行動には不安があり、惨めでやるせない気持ちのまま林道の湿り気がある部分にもどつてチョウタイム。路面に湿り気がある部分は 3 か所でそれぞれが約 200m 離れていて、途中は日照りがきつい乾いた道を歩いて往復するわけだが、北海道なのに日中の気温が 30 度近くなつていて楽ではない。車で入れる一番奥の湿地帯まで暑さをがまんして戻ると、クジャクチョウがやってきているがただの 1 頭だけ。ゼフィルスがいなかと路傍のコナラなどの枝葉を叩いて回ると、木陰で休憩していたクジャクチョウやコヒオドシが飛び出してくる。一方、妻は木陰の多い場所でメスアカミドリシジミのテリ張りポイントを見つけ、長竿を駆使してみごとな新鮮♂を複数頭ゲットしてくれていた。

